

第70回山口西田讀書會（2015年4月11日）

前回（2015年4月4日）のプロトコル(担当:佐野)

参加者：千葉、桑原、萬納寺、林、長谷川、山口、来栖、岡田、山本、佐野

1. 佐野プロトコルについて

1) 「アリノママの自分」について

佐野のプロトコルの中に以下の文章があった。「我々は一面において真の自己にまっすぐに通じている。それ故芸術道德宗教の極致にまっすぐ通じており、我々の中の数少ない天才の業績も可能となるし、我々はそうした天才の業績に与ることができる。もっと言えば、我々はすでにこうした世界に生きている。しかし他面において我々が本質的に意識的存在である以上、我々には真の自己の領域は完全に閉ざされている。したがって我々は偽我を生きるほかはない。その点からすれば、自分が真の自己、アリノママの自己であるなどと言うのはすでに偽我に落ちていると言える。ここでも我々は絶対に矛盾した有り方の中にある」：この「アリノママの自己」に質問が集中した。「アリノママでいい」という自己肯定が広く社会に受け入れられる風潮について報告があり、それについて議論がなされた。それは甘えではないか（逃避ではないか）、格差社会の勝ち組が言っているに過ぎないものではないか、などの意見が出された。そもそも「アリノママの自分」などあるのか、という質問が出た。挙手していただいたところ、「ある」派も「ない」派も「どちらとも言えない」派も数名いらっしまった。「アリノママの自分」は胎児段階ではあるかもしれないが、それ以降人間は常に文化的な背景の中で一定の役割を果たしているのであって所謂「アリノママの自分」などはないという意見、アリノママでいることのできる場と、そうでない場があるという意見、何十年もアリノママの人生を送ってきたという意見などが飛び交った。

次いで西田先生が仰る判断以前の「純粹経験」は「アリノママの自分」あるいは「真の自己」と言えるか、取り分け「至誠」ないし「無心の境地」は「真の自己」と言えるか、例えば「無我夢中で人を殺してしまった」、これは「真の自己」ということになるのか、この点が議論になった。それは言えないという説と、判断以前はアリノママだが、それについて「真の自己」である、「アリノママの自己」である、と判断を下した段階ですでにアリノママではない、という説が提出された。判断以前の感情はどうか、という反論に対してもその感情をまさしくその感情として同定するのはすでに判断であるとされた。「真の自己」「アリノママの自分」という言葉はよく用いられるが、実体はないのではないかとの意見も提出された。（因みに西田先生は『倫理学草案第二』「道德の極致」では「或人は至誠にて悪事をなすことなきや」という問いで暗礁に乗り上げてしまったが、『善の研究』では「断じてない」と答えている（Ⅲ13-1, 2）。ここをどう考えるか。）

西田先生はもちろん、真の自己が存在すると考えている。意志の原因を動機というが、動機として我々は目的観念を挙げることができる。しかし西田先生によれば目的観念より

深い動機が衝動である。衝動は最も深き我々の意志の原因である。そうしてそれは「直接経験の事実」である。「直接経験の事実」だということは、説明がつかぬものだということと同時に、最も深い実在の統一力（理、神）に通じているということである。我々は絶えず願い（欲求、要求）を持つ。我々は常に願いを実現することしか考えないのであるが、この場合に本質的に問題であるのは、願いの実現の方ではない。願いの出处の方である。例えば我々は水を飲みたいと思うし、恋もする。これは直接経験の事実だというのが西田先生の考えである。何故水を飲むのか、何故恋をするのか。生きるためである、子孫を残すためである、とはすぐに思いつくような答えである。西田先生はこれらの答えはあとからつけた説明である、と考える。たしかに水を飲まなければ死んでしまう。ならば我々は何故水を飲まなくても済むような存在でないのか。水を飲まなければ渴くということもない。恋も同様だ。何故人間は渴き、恋に苦しむのか。全く分からない。ここに衝動の深さがある。その点を第三編第四章末尾の文章で確認した。

ただし人間は自然的衝動（個人的、社会的）のままに動くわけではない。必ず観念（言葉）を通じて動く。「守銭奴の利を貪るのも一種の理想より来るのである」（Ⅲ10-4）。そうしてこの観念を統一するのが「理性」である。この理性について『倫理学草案第二』では「主観的理性」と「神性的理性」との区別があることが紹介された。「主観的理性」は衝動に基づいて目的観念を定める。上の例で言えば喉が渴けば「水を飲む」、「ジュースを飲む」などの目的観念を持つ。目的観念が「希望」（Ⅲ10-6）と呼ばれ、それを抱く「主観的理性」は「偽我」である。この主観的理性は次々と目的観念を定め、それを実現しようとするが、絶対的な満足にいたるといことがない。渴きにしても恋にしてもそうである。無限に繰り返すしかない。家族仲良く暮らしたい、世界が平和であってほしいというのも同様である。（そうして最後には死や人類滅亡が待っている。こうした人生に対する「疑惑煩悶」が宗教の起源となるというのが西田先生の考えだ。このあたりは『倫理学草案第二』に詳しい。『善の研究』でも「宗教的要求」の出处は主観的自己の無限進行であると考えられる。宗教的要求は主観的自己の要求の極点、すなわち行き詰ったところで、「我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知する」という仕方で起こっている。：筆記者）

これに対し「神性的理性」が「真の自己」である。この理性も衝動であり、最も深い所から出ている。すなわちどこまでも深く、分からないものである。それ故「理そのものは創作的であって、我々はこれに成り切りこれに即して働くことができるが、これを意識の対象として見ることのできないものである」（Ⅱ6-4）と言われる。（「真の自己」は純粹経験説によれば実在の統一力ということになる。しかしそれが何であるかを言うことはできない。西田先生はただ『真の自己を知れ』と命ずるのみである。「善を学問的に説明すれば色々の説明はできるが、実地上真の善とはただ一つあるのみである、即ち真の自己を知るといにつきてはいる。・・・我々は道徳上においてこのジョットーの一円形を得ねばならぬ」。（Ⅲ13-5）：筆記者）

## 2) 国家と人類社会について

西田先生は個人性、家族、国家、人類社会、さらに宇宙を各々一人格と考える。人格とは統一力のことであり、個人ないし主観的自己においては要求という形をとる。人格の要求を離れては、富貴、権力、健康、技術、学識も何の価値も持たない。それで第一の人格の要求は個人性の実現である。ところが西田先生はそれに止まらず、家族を統一する力を認め、それも人格と呼ぶ。かかる人格の要求があるから男女は恋をし、家族を形成すると考える。国家についても人類社会、宇宙の根底にもかかる統一の要求があると考え。読書会では国家と人類社会の間にギャップがあるのではないか、との意見が出され、それに対する反対意見も提出された。人類社会、さらには宇宙の根底の統一力の方が根本的である、というのである。(西田先生は「今日はなお武装的平和の時代である」という現状を認めつつ、「遠き歴史の始めから人類発達の跡を辿って見ると、国家という者は人類最終の目的ではない」と述べている(Ⅲ12-8, 9)。ここをどう考えるか。: 筆記者) この問題は問題として残しておくことになった。

3) 「発展(evolution)は内展(involution)」はヘーゲルの『大論理学』ではなく『自然哲学』(ズールカンプ社版ヘーゲル全集第 9 巻 38 頁。1970. Die Evolution ist so auch Involution, indem die Materie sich zum Leben involviert.)に見られるものであるとの訂正があった。ただ、この程度のことであればヘーゲル以前にも言った人はあるかもしれないとも。

## 2. テキスト講読 (第三編第九章第五段落途中から最後まで)

「この統一力即ち自己は何処より来るかというに、つまり実在統一力の発現であって、即ち永久不変の力である。我々の自己は常に創造的であって自由で無限の活動と感ぜらるるのはこのためである」における、我々の自己の由来となる「実在統一力」とは「神性的理性」ないし「真の自己」のことであると解釈された。

次にある「前に云ったように」が第二編第七章第三および第 5 段落を踏まえたものであることが確認された。これに関連し「自己を対象として見ることはできない」について、それはそうだが、科学的に自己に接近することはできる、との発言があった。それに対し『倫理学草案第二』における「見者の地位」と「作者の地位」の区別が紹介された。『倫理学草案第二』では前者は科学の立場であり、後者が純粹経験の立場であるとされている。『善の研究』では科学も対象を外から眺めるのではなく、内面からその真意を自得、理会すべきものと考えられていることが紹介された。